

## シェフ三瀧の“時事中国語調理の秘訣”

前回述べたように、中国語は4文字の成語が大変多用されます。リズムや格調を尊ぶからです。文法の本では、文を述語で分けて分類するときに、動詞述語文とか形容詞述語文とかを列挙しますが、どこにも成語述語文と言う分類が見当たりません。これはいささか問題です。

例えば、“国内的各个著名景点一到节假日就人满为患。”という文で、“就”は明らかに副詞ですが、字面だけ見れば、その後の“人”は名詞で、基本文法では“就”は名詞に掛かれませんか、これは誤りではないか、ということになってしまいます。しかし、“人满为患”は一つの成語として認知されており、それだけで述語性があるため、その前に“就”が置かれても、何も問題は無いわけです。

4文字にするための道具立ての一つとして、今回はまず“令人～”を取り上げましょう。

“令”は書き言葉用の語彙として使役に使われますが、使役用法の場合、その目的語はほぼ“人”に限られるとあってよいでしょう。言葉を変えれば、“令人”で熟している、とも言えます。

さて、この“令人～”ですが、例えば“令人吃惊”/“令人鼓舞”などを訳す時、「人をして驚かしむ」/「人をして鼓舞せしむる」などと訳せば、まるで古文の書き下し文のようで、実際は、「びっくりさせられた」/「勇気づけられた」と訳すべきでしょう。すると学生さんの中には、当然のこととして、「使役というけれど、これじゃ受身ではないですか。変だ。」と疑問を抱く人がいます。

しかし、“令人～”の場合、この“人”は、話し手を含む、世の中全体かあるいは不特定の周囲の人々を指すのですから、受身的な訳にするほうがむしろ文意にフィットするのです。